



## ジャージーのミルク

金丸弘美  
食総合プロデューサー

牧場を開放しての料理会を毎年開いている。会場は八王子にある磯沼ミルクファーム。新宿から四十分ほど、京王線山田駅から徒歩十分のところにある。来場者がまずびっくりするのが、都内に牧場があるということ。しかも周辺は木々に囲まれ、羊もヤギも鶏もいるということだ。

ここで乳搾りから牛の品種によって違うミルクの味比べ、牧場栽培の小麦でのピザ作り、牧場の野菜のミルク鍋、ヨーグルトのデザートとフルコースを体験してもらおうのである。ピザのトッピングに使うのは、牧場の牛のコンビーフやサラミ、畑から直接とってきた野菜などを使う。

今年は、非常勤講師をしている明治大学農学部、大妻女子大学家政学部の学外授業として料理会を開いた。普段は野菜を畑からとってスープやピザを作るなどないから、みんな大喜び。なにより新鮮な素材で作る食べるから楽しいしおいしい。大評判だった。

学生たちに体験させたかったのは、現場に少しでも触れてもらい、本物の味を知ってほしいと思ったからだ。それに講義だけでは、私自身もものたりない。

牧場には、ジャージー、ブラウンスイス、ホルスタインの三種の牛が飼われている。とくに磯沼さんが力を入れているのが、ジャージー種。国

内で飼育している牧場はごくわずかだ。

ジャージーは小柄で目がパッチリとして実に可愛い。子牛はバンビみたいだ。ジャージーのミルクのヨーグルトは、上層部にたっぷりのクリーム層ができる。口に入れるとカマンベールかという味。ミルクの優しい甘味をしつかり抱え込んでいて、ゆっくりと口のなかに溶け込んでくる。パンにつけて食べられる。

「天然酵母のライ麦パンなんか最高だな。ブルーベリーを入れても最上だよ」と磯沼さん。以前、とれたてのブルーベリーをもつてでかけて、牧場でヨーグルトをいただいたら幸せいっぱいになった。

ジャージーのミルクには、ホルスタインに比べて、脂肪球が大きくてクリームが分離しやすい性質があるのだそう。バターになる乳脂肪率が六%と高く、カロチンを多く含んでいる。淡く美しい黄色がかっているの、バターの原料乳として最適という。楽しくなって、何度も通い、牧場で料理会を開こうとなって、このあと、毎年「牧場の料理会」が恒例となった。



ジャージー種の牛

単純だけど、みんなが感動するのが、ミルクのテイステイングだ。

日本で多くを占めている乳牛はホルスタイン。原産はドイツのホルスタイン地方。乳と肉ともに利用され、スーパーで販売されているミルク、それに肉売り場の「国産牛」の多くを占めている。乳量は年間六トンから八トン。乳脂肪率は三・五％。ジャージーは薄い茶色の美しい毛色している。原産は英仏海峡のジャージー島。小型の牛で、乳量は年間約四トン。乳脂肪率が約六％、脂肪球も



牧場でのマイピザ作り

大きい。クリームが分離しやすく、カロチン含量も高くて美しい黄色をしている。バターやクリームとして使われる。

ブラウン・スイスは原産はスイス。乳用肉用役牛として利用されていた種を、アメリカで乳専用種に改良したもの。薄い茶色をしている。大きな乳房をもっている。乳量は年間約四・八トン。乳脂肪率は四％。チーズ用に使われる。

飲み比べてみるとホルスタインはさらりとした感じ。自然の甘味があつて、じんわりと口に広がる。

る。ジャージーのほうがすこし濃い目で、ほんのりバターのような味わいさえある。見た目は薄いストロー色だ。ブラウンスイスは濃い目の味で、ジャージーに似ている。三つとも味が異なる。

学生が、飲んだあとで、目をまるくする。「えっ、牛でミルクの味が、こんなに違うんですか!」とか「ミルクの味の違うなんて、わからないと思っただけだ、私にもわかる!」という声があがる。「ヨーロッパのチーズの多彩さは、牛の品種の違い、あるいは、羊やヤギといった家畜の違い、さらには土地土地の発酵をうながす菌の違いや熟成の違いにもあるんだ」と話すと、みんなが「へー」と、驚きの顔になる。

ピザ焼きは、みんな熱がこもる。野菜を多く入れる、ピーフ中心、チーズたっぷりなど、できあがると、みんな違う。手に持って並んでもらうと、それぞれ個性的なのが楽しい。お互いが見比べて「素敵!」と、みんなが褒めあっている。お店ではまったく登場しない多彩なピザが勢ぞろいする。これを溶岩釜で焼く。最初はおそろおそろ始まるのだが、コツがつかめ始めると、夢中になってしまふ。

野菜たっぷりのミルクのスープ、野菜サラダと、ピザ、三種類のミルク、そして最後に登場するのがジャージーのヨーグルトを使ったデザート。クリーミーで、味わいが豊かだ。これまた「おいしい!」と感嘆の声が、みんなからあがる。そして笑顔があふれる。ついこちらも嬉しくなってしまうのだ。

牧場の料理会が終わったら、走ってきた女学生がいた。

「先生! こんな体験、またしたいです。毎週でもやりたいです。また連れて行ってください!」とても嬉しい一日だった。